

【会員紹介コーナー】キラリ★活躍人 #02

前号から始まった新コーナーです♪

群馬県社会福祉士の会員は、実にさまざまな分野で活躍しています。

そんな「キラリ☆活躍人」にインタビュー！

その分野のことに興味をもつキッカケになれば幸いです。

今回は、ハンセン病福祉研究委員会の戸澤由美恵 委員長にお話を伺いました。

戸澤由美恵 さん

元高崎健康福祉大学准教授（現非常勤講師）
当会 ハンセン病福祉研究委員会 委員長



Q・ハンセン病福祉に携わるきっかけは？

A・私がこの分野に関わり始めたのは大学卒業後のことです。母校の先生から「群馬県出身なら栗生楽泉園という療養所を知っていますか？」と聞かれました。1996年の「らい予防法」の廃止を機に園へ行きたいから繋いでほしいと誘われました。

Q・栗生楽泉園への初訪問はいかがでしたか？

A・園には入所者の自治会があります。初めて園に伺ったとき、自治会の役員の方々に「この人たちは信用できるのか」と値踏みされているように感じ、非常に緊張しました。

Q・入所者の方々とどう距離を縮めていきましたか？

A・自治会が発行した50年史『風雪の紋』を読んできたことを伝え、何も知らないけれど誠実に向き合いたいと正直に答えました。それから特に入所者の女性たちのライフヒストリーを聞かせてほしいとお願いし、1年ほど定期的に通い続けました。

Q・聞き取りのなかで印象に残っている話は？

A・10歳で強制入所させられ家族と離ればなれになった絶望、顔の腫れを理由にバスへの乗車を拒否された経験、また火傷の治療で、医師が知覚麻痺のある指だからと「はさみでチョコキョキきられちゃったの」という凄惨な話もありました。当時の医療がケアではなく「管理」であった実態を突きつけられました。

Q・当時の園の様子は？

A・800人以上が入所していて活気があり、庭の手入れも行き届いていました。印象的だったのは「盲導鈴（もうどうれい）」の音です。後遺症で視力を失った方々が場所を把握するためのものなのですが、下界とは違う静かな時間の流れの中にその音が響いていて、私にはどこか心地よく、落ち着く場所でもありました。

Q・そうした活動から、2010年の「ハンセン病福祉研究委員会」設立へ繋がっていくのですね。

A・国賠訴訟で勝訴したものの、約束された社会復帰支援や名誉回復が十分に進んでいない現状がありました。日本弁護士連合会からの被害実態調査の委託をきっかけに、ソーシャルワーカーとして組織的に支援を行う必要性を感じ、群馬県社会福祉士会で委員会を立ち上げました。

Q・設立から15年近く経ちます。現在の課題は何でしょうか？

A・最大の壁は、社会復帰した方々がどこにいるのか分からないことです。ご本人は病歴を知られることを極端に恐れています。偏見を恐れて一般の医師にかかることも、介護保険を利用することも拒む方が多く、孤立したまま高齢化が進んでいます。また、制度上の問題もあります。退所者給与金を受け取るための「現況届」を2ヶ月に1回提出しなければならないのですが、高齢者には頻度が高すぎ認知症なども出始めて、出し忘れて給付が止まるケースが出ています。こうした事務手続きの代行支援すら、身元が知られる不安からどこにも相談できずにいます。

Q・今後の活動で、どのようなアクションを考えていますか？

A・地道な啓発活動を続けていきます。冤罪の疑いが強いまま死刑が執行された「菊池事件」の再審請求棄却（2026年1月）は非常に残念でした。当事者が亡くなれば終わりではなく、家族への差別も含め、多角的・重層的な解決が必要です。

「昔ハンセン病だった」とさりげなく言える社会になるまで、専門職が理解を深め地域に働きかけ、当事者の不安を軽減していく努力を続けていかなければなりません。今回制作したDVDの活用、さらには、委員会の誰でも等質の講義ができる「標準化教材」を作成し、特にケアマネジャーや看護師などの専門職向けに、後遺症や心理的背景を理解してもらうための研修に力を入れていきたいと考えています。

社会課題から目をそらさず、委員会設立というアクションを起こして活動が続いている戸澤さんの姿勢に、同じ会員として私も何か動き出したい！と刺激を受けました。がんばろう！

（インタビュー及び文責／広報・コミュニケーション委員会 星野久子）

3月14日(土)の総会で DVD上映&ミニ講演

ハンセン病福祉研究委員会制作DVD「栗生の園に生きた証」のダイジェスト上映と、戸澤委員長のミニ講演を実施します。会員同士で、この問題について語り合いませんか？
3月14日(土)総会に、ぜひお越しください。

